

# 第3回新鋭俳句賞

正賞

該当なし

準賞

「台所」

西生ゆかり

「纜」

木本隆行

台所

# 西生 ゆかり

紫陽花や一段下がる台所

冷蔵庫に貼りつばなしの登山地図

登山地図の裏にも地図が描いてある

夫は知らない鏡の裏の黴

メロン来るあまり可愛くない箱で

集金の人が網戸の前に居る

手招きの手が網戸まで伸びてくる

蠅動く人数分の水が来て

蜜豆にチェリー夜から始まる日

クリームソーダがストローを暗くする

人間は一人で話すバナナパフェ

プールサイドに番号の無い子供

水馬の治す所の無い体

吐いた日は花火がゆつくりと上がる

サングラスと名刺と立つてゐる煙草

洗ひ髪鏡の中に乾きゆく

河鹿笛まだ嫌ひではない夫

枇杷の実や住むかもしれない街

朝曇あなたのならかな額

小鳥来る黒いシールのやうな目の

柿入れて斜めになつてゐる鞆

赤子の背叩けば秋の日のリズム

鳥渡る長さの違ふ芋けんぴ

着ぶくれの吾を一瞬見る子供

理解して子供が食べてゐる海鼠

マフラーと名刺の置いてある座椅子

人参を刻む機械が濡れてゐる

くしやみして一瞬夫が遠くなる

鍋焼やもうすぐ終はる資本主義

その後の機械の温み冬銀河

纜

# 木本 隆行

北窓開く一羽の鳥を放つごと  
囀や空ひき合うてゐるごとし  
太白のふくらむ宵のさくらかな  
手の裏にのこる湿りや紙風船  
目借時名刺の裏の白さかな  
桜葉降る斎場といふ出会ひの場  
噴水の日を抱き余し高くあり  
遠浅のひかりを招くサングラス  
裏木戸を付けて箱庭ととのへり  
刃物屋のやいばの揃ふ大暑かな  
纜を解き夏雲を帆としたり  
開けつ広げの家しづかなり仏桑花  
吾が顔が貌となりたる茂りかな  
山国の水に芯あり洗鯉  
ひんやりと土間のにほへる夕立かな  
吾が影の波に洗はれ盆の風  
下書きのいらぬ文書く金木犀  
菊人形余情あまりて匂ひけり  
朝寒の声まつすぐに立ちにけり  
稜線に力を残し山眠る  
マスクして渋谷のこゑに溺れをり  
難題と嚏もちくるをとこかな  
流木の風葬めきて冬ざるる  
鉄瓶の湯を練るおとや漱石忌  
大寒の影をはなさぬ櫟かな  
蘆枯れて水は光陰うばひけり  
大霜や未踏の土地となりゐたり  
冬木の芽空に梯子をかけるごと  
心音にしたがつてゐる探梅行  
寒晴や水平線を引く力